

選者 川口孤舟

句会出席 柿崎忠彦 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 豊田ゆたか 古田昇

山崎亜也 山田けい子

投句・選句 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 西澤國護

古川百合子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章 福島正明

星田啓子 山本三恵



十点

◎湿原に天女のごとく鶴の舞ふ

昇

(孤・忠・く・○健・と・た・己・
ゆ・允・盛)

八点

門のわづかに軋む小夜時雨

とみ子

(五・清・己・堂・百・啓・天・盛)

七点

駅蕎麦にどさと薬味や雪催

康敏

(くす・健・と・清・己・啓・亜)
(く・千・○龍・清・啓・亜・盛)

木枯らしに追われ空き缶ひた走る

百合子

(くす・健・ゆ・國・允・百・亜)

六点

見通しのきく影となり冬木立

國護

(く・五・健・た・清・昇)
(孤・龍・堂・け・三・盛)

◎湯豆腐や箸の触れ合ふ夫婦膳

昇

(○くす・孤・康・隆・亜・三)

◎指折りて干支を確かむ年の暮

けい子 亜也

(孤・五・と・千・堂・昇)

五点

冬薔薇死亡通知を読み返す

五郎太

(忠・千・隆・け・天)

◎枯木宿帳場に古き大時計

康敏

(くす・孤・○く・己・允)

極月や不穩の気配そこはかと

亜也

(忠・五・孝・正・啓)

◎枯蓮の折れても風にあらがえり

けい子

(くす・孤・五・○孝・昇)

◎一人へり二人へりして賀状書く

天牛

(孤・忠・ゆ・允・正)

四点

古里の初雪便り懐かしく

忠彦

(た・龍・ゆ・隆)

里山が荒れて熊まで荒れ始め

全

(千・た・ゆ・正)

冬ざれて観音堂に一人かな

けい子

(く・千・三・天)

鱒酒の香り楽しむ下戸の酒

全

(く・龍・ゆ・百)

三点

小春日や艶際立たせ実南天
 承和色(そがいろ)をA Iに問う冬の菊
 古屏風時を染みとし立ちつくす
 ◎父憶ふ箆笥の隅のマントかな
 ◎ぶらり寄る銀座の老舗日記買ふ
 冬の空抹茶に干柿添えて飲む
 ポケットに手袋あるを確かめて
 ◎夫婦ふたり分相応の年用意
 精検終へ妻の足取り小春かな

くにお
 千恵 (龍・清・三)
 正己 (百・啓・盛)
 堂哉 (堂・百・啓)
 全 (孤・と、孝)
 全 (孤・孝・康)
 ゆたか (龍・國・天)
 國護 (隆・正・昇)
 昇 (孤・允・三)
 盛雄 (くす・と・堂)

二点

木枯らしや窓打つ風の夜深かな
 寒せりを小鍋に移し少し待ち
 我ひとり少し残せし薬喰
 ペン画にて天使を描く十二月
 楽しくて苦しき句作年歩む
 山茶花の花は静かに散り始め

忠彦 (た・國)
 五郎太 (國・亜)
 全 (百・〇・三)
 全 (康・昇)
 千恵 (と・た)
 千恵 (千・國)
 ただしげ

那谷寺にて

◎本堂へ芭蕉の影や冬紅葉
 悲しき日嬉しき時も温め酒
 年忘れまた一人欠け献盃を
 氷雨ふるビルの谷間に古雑誌
 夜鴉や真冬の空を征しおり
 江ノ電の車窓を過ぎる冬銀河
 熊もまた住み難き世や温暖化
 ペットにも七五三する社かな
 窓一つカードに開け待つクリスマス

堂哉 (孤・孝)
 國護 (健・け)
 全 (健・康)
 百合子 (孝・け)
 全 (五・け)
 全 (己・正)
 昇 (忠・正)
 全 (忠・〇・昇)
 亜也 (清・堂)
 全

一点

時告ぐる潟のチャイムや暮易き
 古き絵図ネットで探す年の暮
 ◎楽聖の第九に酔へる師走かな
 幾重にも奥行深き紅葉かな
 「熊」と揮毫こんなに嫌われるとは
 竜田川錦織りなす紅葉かな
 吹く風に立つ白波や瀬戸の冬
 暖房機猫が毎朝丸くなり
 ポインセチア抱へ乗り込むエレベータ
 鯛焼や急ぎ食する塾の道
 両隣助け合う日々年の暮

くにお
 五郎太 (己)
 健介 (亜)
 全 (孤)
 千恵 (け)
 全 (盛)
 全 (康)
 全 (國)
 全 (隆)
 全 (隆)
 正己 (天)
 康敏 (隆)
 ゆたか (康)

松葉蟹境港へ食べに行く

永久の十二月八日少年老ふ

天牛

盛雄

(允)

(天)

【句評・短評】

十点句

湿原に天女のごとく鶴の舞ふ

昇

孤舟選者……孤高の鶴は天女の再来か。

健介さん……そうなんでしょうね、羨ましい。その“天女”一度は拝んでみたいものです。

ただしげさん・美しい情景が目には浮かぶ様です。

とみ子さん……美しい景が、目に浮かびます。

允章さん……昔、たくさんの鶴の舞を見ました。

盛雄さん……鹿兒島の出水の群鶴は見事で、俳人の多くが足を運びます。「秋」(毎年十月中

旬から翌3月頃にかけて越冬)

八点

門のわづかに軋む小夜時雨

とみ子

五郎太さん……木戸のあるご自宅、いやお寺かも。鋭い観察が静かな佳句になりました。

堂哉さん……小説のこれからの出来事をあれこれ想像させます。待ち人来るか？秘かに帰るの

か？

百合子さん……時雨に軋む門、すばらしい感性！

啓子さん……些か古い大きなお宅。静かに時雨が降りて風が僅かに門を鳴らしている。しんとし

た景を表現して巧です。白黒映画の一シーンのような雰囲気を感じられます。

天牛さん……門が効いていますね。それが軋んでいる古い光景ですね。

七点

駅蕎麦にどさと薬味や雪催

康敏

とみ子さん……薬味たつぷりで温まるでしょうね。

正己さん……普通の蕎麦屋ではあまりできません。寒い日にかけそば一杯たまりませんな。

啓子さん……寒くて飛び込んだ駅蕎麦ならではの景。中七が効いていると思います。

亜也さん……何といっても「どさと」の迫力と説得力。

木枯らしに追われ空き缶ひた走る

百合子

千恵さん……風に吹き飛ばされている空き缶を生き物のようにとらえた表現が面白いです。

龍平さん……お相撲琴風が歌う演歌(東京たずね人風)の噂に 銀座↓赤坂↓六本木)を連想しまし

た。寂しい空缶。なかにし礼(猪俣公章のコンビは何時も人を泣かせます。

啓子さん……擬人化が効いて、時に目にする景がユーモラスにやがて哀しく。

亜也さん……西部劇に出てくる回転草を連想。ドライな寂寥感がいい。

盛雄さん……一瞬を素早く詠まれた佳句。

柚子風呂に來し方行方浮き沈む

盛雄

允章さん……私も庭の柚子をご近所にも配り、ゆつたりと柚子風呂を楽しみました。

百合子さん……柚子の浮き沈みをさらりと句にする豊かさ！

亜也さん……柚子の浮き沈みに託す感懐。

六点

見通しのきく影となり冬木立

國護

五郎太さん・影となり、が上手です。

ただしげさん・寒々とした景色が想像できる。

湯豆腐や箸の触れ合ふ夫婦膳

昇

孤舟選者……老いて益々夫婦仲は円満のようだ。

堂哉さん……思わず箸を引つ込め、眼で笑ってお先にどうぞ！

諍いで一人で帰る冬の月

けい子

孤舟選者……一種壮絶な美しさの月に見守られて、ひとり寂しい帰路。

康敏さん……折角の年忘れに口論してプイツと立ち上がり一人で帰る。寒々しい月が身に沁みる

隆さん……何の諍いでしょうか。亡き母も、私の手を引いて実家へ帰ったことがあったと。

亜也さん……「諍ふ」の文字と語感の妙。「友がみなわれより」の啄木の短歌のパロディに

「妻と諍ふ」で締めくくることがあるのをふと思ひ出しました。

指折りて干支を確かむ年の暮

亜也

孤舟選者……この歳まで生きると、年男だと言われても何回目かは俄かに分からない。

五郎太さん……私は最近では十二支もちよつとあやふやです。

とみ子さん……年末になると来年の干支を 確かめます。分かります。

千恵さん……私も年賀状を書くとき先ず「今年の干支は何だったかしら」から始まるので共感です。

堂哉さん……午年で年男なのですが、さて何度目かなと数えています。

五点

冬薔薇死亡通知を読み返す

五郎太

千恵さん……死亡通知を受け取った時の気持ちと季語が響き合っていると思います。

隆さん……死は、無に帰することだと思ふようになった。「一秒一生」死が軽々となった今、

死を考えるようにしたい。

天牛さん……あの人は本当に亡くなったのだな、とつくづく思うのでしょう。

枯木宿帳場に古き大時計

康敏

孤舟選者……老舗旅館の歴史の刻を刻んできた「お爺さんの古時計」

允章さん……昔の映画でよく見た光景です。

極月や不穩の気配そこはかと

亜也

五郎太さん……極は、極道だったり、極めだったり、さて来年はどうなるか。

枯蓮の折れても風にあらがえり

けい子

孤舟選者……枯蓮に風が吹き来ると、茎や葉が打ち合つて音を鳴らす。

五郎太さん……そうした中で耐えている、蜂の巣のような枯れた花には、独特の力があります。

孝岳さん……「歳老いても気概を持って生きよ。」と諭す如き句です。「はい。そういたします。」

英気を貰いました。

一人へり二人へりして賀状書く

天牛

孤舟選者……「賀状仕舞い」が世の常識になってしまったようだ。

允章さん……今年には八十九歳になります。賀状は今年から止めました。

四点

古里の初雪便り懐かしく

忠彦

ただしげさん・古里の便りは懐かしく嬉しいもの、理解できる。

隆さん・・・忙しい都会暮らしで季節の便りは望郷の念を呼び起こす。

冬ざれて観音堂に一人かな

けい子

千恵さん・・・寒々しい観音堂にいるけれど、作者はどこかこの状況を楽しんでいるような気がします。

天牛さん・・・うす暗い堂はたった一人が寒々としています。

鱸酒の香り楽しむ下戸の酒

けい子

百合子さん・・・河豚の鱸酒の香には下戸をついつい忘れさせる魅力がありました。

三点

承和色(そがいろ)をAIに問う冬の菊

千恵

百合子さん・・・この句でも、承和を辞書で。少しずつ私も賢くなっているでしょうか。

啓子さん・・・日本には色を表す言葉が溢れている、それは世界でも類を見ないほどのことだそうで、雅な歴史を紡いできた証か、と一種感動を覚えます。

古屏風時を染みとし立ちつくす

正己

堂哉さん・・・中七で頂きました。

百合子さん・・・染みを時の積み重ねと思えば、老いることもまた至福！

啓子さん・・・中七が時の重なりを巧く詠まれていると思います。

父憶ふ箆笥の隅のマントかな

堂哉

孤舟選者・・・思えば意外とモダンな父親だった。

とみ子さん・・・祖父が、愛用していたインバー(インバネスコート)を思い出しました。

ぶらり寄る銀座の老舗日記買ふ

堂哉

孤舟選者・・・新しい日記帳は、使い慣れた銀座鳩居堂のものに決めている。

康敏さん・・・「ためらはず博文堂の日記買ふ 高見孝子」。作者は何処の日記を買ったのだろう。

冬の空抹茶に干柿添えて飲む

ゆたか

龍平さん・・・何か重なった感じの句。然しさっぱりした乙な感じもしました。

天牛さん・・・抹茶に干し柿とは、縁側に座って飲む風情ですね。

ポケットに手袋あるを確かめて

國護

隆さん・・・カクニン、カクニン。無意識の動作が忘れの原因と医師は言う。ドアのカギかけ、かけた状態を少しでも凝視すると記憶を刻み、忘れないそう。

夫婦ふたり分相応の年用意

昇

孤舟選者・・・新年を迎える準備は省略することが多くなった。

允章さん・・・全く同感です。

精検終へ妻の足取り小春かな

盛雄

とみ子さん・・・季語の「小春」でほっとしました。

堂哉さん・・・奥様の喜び、嬉しさが上手く出ています。おめでとございました

寒せりを小鍋に移し少し待ち

五郎太

亜也さん・・・日常のちよつとした楽しみに俳味あり。長火鉢の炭火にかける景をイメージしました。

我ひとり少し残せし薬喰

五郎太

百合子さん・・・またしても薬喰を辞書で調べ、日本語の奥深さを知りました。

三恵さん・・・「薬喰」の季語を調べましたが、なぜか、西洋の「ジビエ」を連想しました。とは言

え、この季語がこの場面に絶妙にマッチしていて、俳句表現の奥行の深さを垣間見ることができました。

ペン画にて天使を描く十二月

五郎太

康敏さん・・・意表を突いた句だが、「十二月」が効いている。

楽しくて苦しき句作年歩む

千恵

とみ子さん・・・共感いたしました。季語「年歩む」に味わいがあると思います。

ただしげさん・同感です。

那谷寺にて

本堂へ芭蕉の影や冬紅葉

堂哉

孤舟選者・・・芭蕉が那谷寺を訪れたのは秋風の吹く9月だったが、紅葉時の今日も幻の芭蕉像に出

逢えたのであろう。

悲しき日嬉しき時も温め酒

國護

健介さん・・・冬は温め酒に限りますね、悲喜に拘わらず、每晚欠かさない己と重ね合わせました。

年忘れまた一人欠け献盃を

國護

康敏さん・・・高校の同期会の集まりも、十年前は百五十人程いたが、今や五六人。

夜鴉や真冬の空を征しおり

百合子

五郎太さん・・・一羽が鳴いているのでしょうか。バタバタと飛んだのかもしれませんが。ちよつと

不気味でもあります。

ペットにも七五三する社かな

亜也

昇さん・・・ペットも七五三をする時代になったとは。着飾ったペットも得意顔。楽しい句で

す。神社の商魂も逞しいですね。

窓一つカードに開け待つクリスマス

亜也

堂哉さん・・・「娘からアドベントカレンダーを初めて貰いました。毎朝、窓を探して開いて楽しん

でいました

一点

古き絵図ネットで探す年の暮

五郎太

亜也さん・・・江戸の絵図なら「大江戸今昔めぐり」というアプリが、今の地図に昔の切絵図を重ね

てあって探訪に便利です。

楽聖の第九に酔へる師走かな

健介

孤舟選者・・・ベートーベン第九番「合唱」は年末の定番。

竜田川錦織りなす紅葉かな

ただしげ

康敏さん・・・在原業平の和歌で知られる竜田川の紅葉を、力強く表現した。

暖房機猫が毎朝丸くなり

ただしげ

隆さん・・・「が」を「は」に変えてボカしてもよさそう。

ポインセチア抱へ乗り込むエレベータ 康敏

隆さん・・・ポインセチアの赤色でお部屋を飾る高揚感。

鯛焼や急ぎ食する塾の道 正己

天牛さん・・・とりあえず腹ごしらえをと、ほおばっている少年！

両隣助け合う日々年の暮 ゆたか

康敏さん・・・最近では隣近所とのお付き合いがなくなつた。「隣は何をする人ぞ」である。「向う

三軒両隣」や「バス通り裏」の時代が懐かしい。

松葉蟹境港へ食べに行く 天牛

允章さん・・・昔、大阪に住んでいた頃、蟹を食べべに境港へ行ったことを思い出しました。

永久の十二月八日少年老ふ 盛雄

天牛さん・・・私も小学校の六年生でした。通学中に街角で友人から開戦を聞きました。その時の状

況は決して忘れることはありません。

(了)



【次回・次々回の青葉会予定】

○第四百七十七回 青葉会 令和八年一月二十二日(木) 午後一時～

於…丸紅株式会社本社 四階会議室

ご出句のご案内 ☆句会ご出席予定の方 当季雑詠 五句

ご投句予定の方 当季雑詠 二句 を目処として

☆ご提出締切日 一月十七日中 星田まで

(FAX 03 - 3421 - 9772)

○第四百七十八回 青葉会 令和八年二月二十六日(木) 午後一時～

於…丸紅株式会社本社 四階会議室

ご出句のご案内 ☆句会ご出席予定の方 当季雑詠 五句

ご投句予定の方 当季雑詠 二句 を目処として

☆ご提出締切日 二月二十一日中 星田まで

(FAX 03 - 3421 - 9772)



【青葉会報】

一、年末句会納め、および 忘年会を十二月十八日木曜日として、開催致しました。昨年は寂しいことに幾許か会員様の活動が減った一年でした。随分と長いこと世話人をされた紀久男さん、惠州さん、びんさんとベテランの方々の方が夫々にご生活を変えられたり、ご入院されたりと一度も選句すらいただけに過ぎております。一方、句会ご出席数はさして変わらぬにありますが、有難く思いますが、ただ、それもこれからの一年はどうだろうかと考えますと、今後の会員増の手段を講じる必要を一層強く感じるところです。

句会納めの後の忘年会は、十一名のご出席で昨年より六名ほどが少ない状態でしたが、そこは俳句に集まられた方々、少ない分充実して皆様とそれぞれが交流出来ましたことは幸いでした。

二、句会後の忘年会では、冒頭の乾杯後、五郎太さんから令和七年の青葉会俳句の総括として、まずは、と、忘年会にご出席された皆様の内、各月でそれぞれ最高得点の発表をいただきました。

中でも突出した具合の、昨年から句会に参加された昇さんの最高得点回数。こちらが四月、五月、八月、九月の四回で、且つ、その内5月ご出句（鯉幟息を吐かせて仕舞ひけり）は十八点という嘗て見たことが無いか?!という大量得点、いずれも快挙といふべきもので、出席者の改めての驚きを誘い、同時に皆様から大きな拍手が上がりました。

次に一月／十二点でとみ子さん一回（嘶家のするり脱ぎおく冬羽織）、忠彦さんが三月／八点と、七月／十三点（遠雷や父の小言をふと思ふ）の二回、十一月／八点で國護さん（立冬の影置かぬ程の薄日かな）初めての獲得、同じく、けい子さん（冬の蝶止まれば止まる散歩かな）一回。

また、特筆すべきか、と、亜也さん（五月 パナ帽わざわざ出番作りけり）の句について。これは五句と雖も、その内「○天」を三名の方が付与され、まさに秀句がこういう形で出ることもある、という例として挙げられました。

最後に、この一年で長足の進歩をされた方として、國護さん、正己さんが挙げられ、大変喜ばしい思いで、皆の拍手が揃いました。

今回の発表は、令和七年の青葉会活動総括として、これまでにない神妙な時間でもあり、一年の締めくくりとして大変意味のある佳き時間となりました。

三、因みに、忘年会にはご欠席でしたが、最高点として振り返りますと、康敏さんが、二月／十二点と十月／十三点（伊那谷の晴れて全村柿すだれ）に十一月／八点の三回、堂哉さんが四月／十点（親友の妻より封書春の雷）一回、盛雄さんが、六月／十四点（戦なき八十年の水鉄砲）という結果を残されています。

改めてこうして拝見するとさすが巧者の句ばかりで、お祝い申し上げると共に、今後の会員皆様の精進のよすがともなると感じたことでした。有難うございました。

【関係者近詠】

あれやこれ未達は全て初昔

盛雄

TVでベートーヴェンの第九を聴きながらの一句

眦の裂けるばかりに第九かな

彦十（楠田ヒロミ）

*今月の「森の座」関係者近詠はお休みをいただきます。

令和八年一月吉日

（了）